

絶望を希望に変えるバカたち

鎌鼬

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 一話

絶望しているほむほむをさらなる絶望に叩き落とし、バカに救わせてみた。

パワーインフレしまくり、ニュー盧生ありありとわりと好き勝手している。

### 二話

FGOの第七特異点にバカが2人現れるらしい。

# 目次

魔法少女を救うバカたち	1
絶対魔獣戦線バビロニア	17
冠位時間神殿ソロモン	28

## 魔法少女を救うバカたち

「……ああ」

吹き荒れる暴風雨の中で、暁美ほむらは絶望していた。暁美ほむらは魔法少女である。キュウベえと呼ばれる存在により願いを叶える対価として魔法少女という存在に成り果てた。

『アハハハハ……!!!』

目の前で笑う影があった。その正体はワルプルギスの夜と呼ばれる最低最悪の魔女。ほむらはこの魔女を倒す為に、そしてその先へと最愛の友人である鹿目まどかを連れ行く為に、キュウベえとの取引により手に入れた魔法を使って時間のループを繰り返していた。

「……ああ嫌だ、認めない、認めたく無い。あんな結末なんて認められない。」

ループの果てはワルプルギスの夜を打倒する為に集まった魔法少女たちが全員やられ、その者たちを助ける為にまどかがキュウベえと取引で魔法少女になるという結末を迎えてしまった。

魔女とは魔法少女の不倶戴天の敵であり、魔法少女が絶望して成り果てた存在である。つまり魔法少女たちはこれから先の未来で自分たちが成り果てるであろう存在を倒しているのだ。こうすることでキュウベえはグリーンフシードを回収し、それで宇宙の寿命を延ばすという行いをしていた。

だが、キュウベえはもういない。救いたかった友人も、共に戦っていた魔法少女たちももういない。

ほむらは知らなかったが、この日はとある組織から《朔》と呼ばれる日であったのだ。何が起こるのかまったく予想のつかない日であり、此度のループでワルプルギスの夜の登場と《朔》が重なってしまったのだ。

まず初めに、ワルプルギスの夜が現れた。それだけならば想定していた通りだった。

次に、ワルプルギスの夜の背後に黒い太陽が現れた。ワルプルギスの夜は嵐と共に現れるのに曇天を塗り潰す様にしてその太陽は天に昇った。そもそも、それは太陽という生命に温もりを与える存在などでは無かった。

その正体は此の世全ての悪、ゾロアスター教典に登場する此の世全ての悪性を司る悪神。だが朔と言えど本物の神を呼び出せる訳ではない。それは遙か太古の時代にアンリ・マユの名を押し付けられた人間だった。アイツこそが此の世全ての悪であるが故に、我らは悪ではなく善であるという傲慢により名を奪われて、悪神としてありさせられた哀れな存在。それにはもう自我などない。ただ望まれた通りに、人々にとつての悪性であろうとするだけの装置。

此の世全ての悪と《朔》が交わった事により、この事態は引き起こされたのだと言えよう。

『俺 呼？呼？ 戦？利 摩橙祇 娑婆訶』

空がヒビ割れて女陰めいた形で固定され、そこから黄金に輝く魔性の瞳が彼女たちを見下ろした。見えているのは目だけで天を覆い隠す程、全体がどれだけの大ききさなのか想像することも出来ない。

『干キ萎ミ病ミ枯セ。 盈チ乾ルガ如、 沈ミ臥セ』

続いて現れたのは枯れ果てた木乃伊が貼り付けられた逆十字。天から見下ろしている魔性の瞳にも負けない程の巨大さを誇り、同様に天から万象を見下している。

『六算祓エヤ、滅・滅・滅・滅、亡・亡・亡オオオ！』

魔性の瞳の前に全身に古びた護符を貼り付けたヒト型が現れ、魔震を引き起こした。コンクリートで出来た建物が、大地が抵抗することも出来ずに塵へと還る。余波だけでも細胞単位で引き裂かれそうになるほどの威力なのだがこれでも魔性の瞳からすれば身動きした程度の物ではない。

そして逆十字を中心として悪性の等価交換が行われた。魔性の瞳が引き起こした魔震に、奇跡的に助かった人間たちから全てを奪い取り、代わりに逆十字を蝕んでいた病魔を押し付けられた。

現れた二体の廃神が破壊と悪性の等価交換を行いながら悠々と領域を侵して行く。

それを見たまどかに、躊躇いは無かった。キュウベエの提案し続けていた取引に応じ、魔法少女となってワルプルギスの夜を、そしてあの災害を撒き散らしている此の世全ての悪と二体の廃神を消し去ることを決意する。本来ならそれは不可能な願いだったが、皮肉な事にまどかを救う為にほむらがループを続けた事によりまどかの魔法少女としての素質は高められていた。

そしてキュウベエとの取引が成立し、鹿目まどかは魔法少女となる。そして祈りと共に、暴威を振るう者らを消し去ろうとした。

『臭い臭い臭い臭い臭い臭い臭い臭い臭い汚い汚い汚い汚い汚い汚い汚い』



夜だけならば成し得たであろう回帰は、魔神と邪神により押し返された。

『何———これ———僕らが———死ぬ———？なんで———どうして———』

全ての元凶であったはずのキュウベえも今はもう存在していない。たまたま近くにいたという理由から波旬に指一つで掻き消されて消滅した。いつもなら殺したとしても新しいキュウベえが現れるのだがそれが無い。最後の言葉から考えるにキュウベえという存在ごと消滅したらしいのだが、そんなことはもうどうでも良かった。

魔女と悪神と、魔神と邪神により崩壊していく世界。それらの進撃を止めることなど誰にも出来はしない。助けたかった少女は死に果て、頼みの綱であった時間の回帰は通用しない。ほむらの内にあるのは絶望一色。

だから、ほむらの出来ることはこれしか無かった。

「ああ……神様……」

全てに絶望した哀れな人間に出来ることは祈る事。人間よりも遙か高みにいるであろう絶対の存在に救いを乞う事だけだった。

この事態が好転するのであれば神でも悪魔でも何でもいい、求められるのであれば心臓でも差しだそう、この魂を玩具にしてくれても構わない。だからどうか、奇跡を、一心不乱にご都合主義ごきせきを乞うていた。

努力や策略などでどうにか出来る領域などもはや逸脱している。この結末を変えたいが為に、奇跡に縋ることしか出来なかった。

人間は死に絶える。

地球は滅びる。

宇宙に点在する存在全てが滅尽滅相される。

それが悪神、廃神、邪神が呼び出された時点での確定事項。少女の祈りなど通じるはずも無く、ただ滅びの時を見ることしか許されなかった。

「……救ってやろう、お前たち全てを」

「……え？」

破滅の音が木霊する中で、そんな声がほむらの耳に届いた。顔を上げれば靴の音を鳴り響かせながら歩いてくる瘦躯の男性。絶望している少女の嘆きを聞き届け、その絶望から少女を救い出す為に、封神されていた盧生<sup>バカ</sup>は顕現した。

「……あな、たは……？」

「そんな顔をするなよ、どうか笑ってくれ。我が父の様に、母の様に。お前たちは幸せになるべきなのだから。俺はお前たちの幸せを願っているのだから」

酔い痴れた話し方で慈愛の笑みと共にほむらに語りかけているの

は、かつて人類を救済する為に全人類を阿片の夢に沈めようとした第六盧生の黄錦龍。英雄によって封神されていた彼は絶望している少女を幸福にする為に再び現世にへと舞い戻った。

「人皆七竅有りて、以つて視聴食息す。此れ独り有ること無し」

黄錦龍の詠唱と共に世界が変貌する。二体の廃神によって破壊された街が元の姿を取り戻したのだった。そしてワルプルギスの夜も、此の世全ての悪も、廃神も邪神も姿を消していた。戦いで付いていた傷も消えている。だが、そんな大きな変化すら些事に思える様なことがほむらの目の前にあった。

ワルプルギスの夜と廃神によって死んだはずの魔法少女たちが、そして邪神によって踏み躪られたはずのまどかが、無傷でほむらの目の前に眠っているのだ。

何をしたのか、何があったか理解出来ない。だがそれでもほむらの望んでいた光景がそこにはあったのだ。

「みんな、な——？」

——夢を思い描け。夢の中ではお前が勝者なのだから。お前たちの幸せを、俺はいつ如何なる時でも祈っている。

黄錦龍の夢とは《夢を見せること》。単純であるが故に誰にでも共感しうる願いを持って、彼は現実で生きる人々を救う為に全人類を阿片の夢に沈めようとしていた。だがそれは間違いであると諭された。そんなことをしても果てにあるのは緩やかな滅びだけで誰も救われないと言われたのだ。

己の信じていた救いが救いにならないと言われた黄錦龍は絶望し、手段を変える事にした。黄錦龍が新たに選んだ手段とは——夢を

現実にする事。心の底から救いを求める者の描いている夢を現実とする事だった。

ほむらは心の底から望んでいた。こんな結末は認められないと。

だから黄錦龍はその望みを叶えたい。あの様な結末を無かった事にした。

「太極より両儀に別れ、四象に広がれ万仙の陣――」

黄錦龍の詠唱に導かれる様にしてあつてはならないと存在がやってくる。それは目視してはならぬ、混沌そのものであつた。

「終段顕象お――」

夢より、その混沌は現れ出でる。

「四凶渾沌――鴻・鈞・道・人イイン」

現れたのは目も、耳も、鼻も、口も存在しない数億の触手で編み込まれた翼と獣毛の塊としか言えない冒瀆的な渾沌。その渾沌の正体は人の想像の産物として生み出された架空の神格。本来ならば神格を有していない筈の渾沌であるのだが人々からの指示を受け、廃神など霞むような、それこそ第六天に匹敵する神格を有している。

かつては黄錦龍より離反した神仙であったが、黄錦龍の祈りに応じて再び現世にへと舞い戻った。

渾沌の出現によりワルプルギスの夜が、悪神が、廃神が、邪神が姿を消される。



触れた存在の幕を引く鐵の戦車。  
愛しい者の足を引く水面の魔性。  
忠義の炎にて万象を焼き尽くす列車砲。  
屍を手繰る大淫婦。  
獲物を絡め取る蜘蛛。  
接触を忌諱する餓狼。

黄金の獅子が英雄と呼び、獅子に忠誠を誓った十一の爪牙が破壊をもたらず。

それだけではない。渾沌によって姿を消した筈のワルプルギスの夜が、此の世全ての悪が、百鬼空亡が、逆十字が、波旬が、超獣帝国の開けた穴から再び姿を現す。

それが《朔》の正体。人の身でありながら身分不相応な願いを抱いた者に絶望を与えるための時間。

「ああ……ああ……!!」

数を増して現れた絶望を前にしてほむらは怯えることしか出来ない。魂にまで刻み込まれた恐怖を拭う事が出来るほどに彼女の精神は成熟していない。もともと成人も果たしていない子供にそんなことを求めるのは酷と言えるのだが。

足が震え、全身から熱が奪われる。このまま膝を着いて身体を丸め、理不尽な現実から目を逸らしてしまいたい。

「……ならぬ!!」

そんな彼女を叱りつけたのは日本帝国の軍服を着た新たな盧生だった。腹の底から絶望が奏でている破滅の音色を掻き消さん程の

声を上げて、怯えるほむらの前に立った。

「諦めるな、諦めてくれるなよ!!諦めたらそこで終わりなのだ!!心を震わせろ、発起しろ!!一人では出来ぬというのなら、心を鬼にして殴りつけてやろう!!だからどうか、立ち上がってくれ!!お前なら、きつと立ち上がれるのだと信じているのだからー!!!」

現れたのは魔王と称される第一盧生の甘粕正彦。人々の輝きを愛するが故に人々に対する試練として魔王である事を望んでいる彼からすれば、絶望で心が折れそうになっているほむらを見捨ててなどおけなかった。

諦めるな、立ち上がれ、お前ならきつと、そうしてくれると信じているから。

それが甘粕の本心、この男は心の底からほむらが再起することを望んでいる。だが、それだけでは足りない。あの絶望によって折れた心と与えられた恐怖を再起させるのにはそれだけでは足りないのだ。

故に、心を燃やす燃料を投下する必要がある。

「ーーそれでもいいのかい?お嬢さん」

意識の外、背後から優しく語りかけられた事でほむらは反射的に後ろに振り返る。そこに居たのは甘粕の着ている軍服と同じものを着ている茶髪の青年。絶望と恐怖で怯えているほむらの目を真っ直ぐに見つめながら彼は問い掛けていた。

「ああ確かに目を閉じて、耳を塞いで、丸くなれば楽になれるだろうさ。何せあれらは俺たちが片付けるからな。それを踏まえてもう一度聞こう、本当にそれでいいのか?」

「求めたんだろう？未知の結末を。望んだんだろう？あの少女の幸福を。否定したんだろう？認められない結末を」

「その為に時間を何度も遡ってループを繰り返したんだろ？だったら……ここで、それを諦めるのか？自分の手で救いたいと願ったからやって来たんだろ？それなのに降って湧いてきた災害に絶望して、ここ一番で他人に任せて良いのか？」

青年の言葉は呪いのようにほむらの心へと染み込んでいく。それを聞いてほむらは理不尽な怒りを覚えた。

「貴方に!!貴方に何がわかるっていうの!!部外者のくせして関係者みたいな顔して!!自分は全部知ってますよみたいな態度をして!!私がまどかを!!初めての友達を助けるためにどれだけ頑張ったか知りもしないで……!!ああもう!!煩いわよそこの獣が!!」

恐怖で折れた心を立ち上がらせるのはそれを上回る程の勇気か、恐怖を塗り潰す程の怒りかと相場が決まっている。青年の知ったかぶっている言葉に怒りを覚えたほむらは、絶望から与えられた恐怖を塗り潰し、立ち上がって帝国万歳と叫び疾走している超獣帝国目掛けてストックしていたRPGをぶっ放した。

RPGの弾頭が炸裂した事で超獣帝国の足が止まる。その身体には致命傷どころかかすり傷すら付いていなかったが、それでもほむらが恐怖を克服して立ち上がった事を知らせるには十分過ぎた。

それを見て笑みを浮かべているのが二人。一人はほむらに熱いエールを送っていた甘粕。そしてもう一人はほむらを煽って立ち上がらせた青年——第二盧生の皐月原時雨だった。

「ああそうだ!!それで良いのだ!!俺はお前が立ち上がると信じていだよ!!お前なら、この絶望を前にしてきつと立ち上がると!!」

「ああ良いねえ、最高だ!!原始的な恐怖で心が折れながらも、それを上回る感情に心を震わせて立ち上がる姿ってのはやっぱり良いねえ!!」

「――人間賛歌を謳わせてくれ!!喉が枯れ果てる程に!!」

全く同じセリフを言った甘粕と時雨の姿はどこか似ているように見えた。別人だと分かっているのに、血の繋がっている関係であるように。

「これはお前が立ち上がった事に対する祝福である!!祝砲よっ!!この満天下に降り注げ!!彼女の勇氣に万歳ッ!!」

「祝砲を上げよう!!それが絶望を知らながらも再起した勇者に対する礼儀という物だ!!」

此の世全ての悪が際限無く魔神を、属性を反転させた英雄を呼び出して大地を埋め尽くしている光景を前にして二人の盧生は恐れなど全く感じさせぬ素振りで見つめた。

「――やがて夜が明け闇が晴れ、おまえの心を照らすまで、我が言葉を灯火として抱くがいい」

「――我が身、地上の生活の痕跡は

幾世を経ても滅びるといことがないだろう

そういう無上の幸福を想像して

今、私はこの最高の刹那を味わい尽くすのだ

時よ止まれ おまえは美しい」

「――終段顕象オオオオ!!!」

「出い黎明ッ!!光輝を運べ――明けの明星オオオオ!!!」

「無間大紅蓮地獄おおおおおおくッ!!!」

甘粕に呼び出されて現れたのは光り輝く聖性を纏った最高位の大天使。その正体は廃神として召喚されている蠅声の墮天前の存在。

時雨に呼び出されて現れたのは日本を覆い尽くす程に巨大な人型の上半身の巨大な蛇神。

蠅声と黄金の獅子、そして第六天が僅かに蛇神の出現に反応を見せたのだがそんなことは御構い無しに二人の盧生は動き出す。

「神鳴る裁きよ!!降れい雷イローロツズ・フロオム・・・  
ゴオオオオオオオツド!!!」

「シーク・イトウル・アド・アストウラ　ローセクウエレ・ナー  
トウーラアアアアアアアアムツ!!!」

大天使の聖光と衛星兵器ロツズ・フロム・ゴツド、そして蛇神から剥がれ隕石の様に落ちた鱗による絨毯爆撃で此の世全ての悪によって呼び出された廃神と英雄らを蹂躪する。

「ローやれやれ、やり過ぎだぞ二人とも。これでは私たちの出番が無いではないか」

「まだ残ってるだけまし。この二人なら全部搔つ攫って行ってもおかしくなかったから」

現れたのは綺麗な女性と少女だった。豪華な金髪と翡翠の瞳の女性と透き通る様な白髪と血の様に紅い瞳の少女。

女性と少女ロー第五盧生クリームヒルト・ヘルヘイム・レーベン  
シユタインと第三盧生皐月原五月雨はあからさまにやり過ぎている  
甘粕と時雨の所業を見て恐るどころかいつも通りだと呆れている様  
に見えた。

「さてお嬢さん、名前はなんと言う?」

「えっ?あ……あ、暁美ほむら……」

「そうか、ならば暁美ほむら!!第二盧生である《俗物》の名において眷属の許可を与える!!願ひ、焦がれる程に求めよ!!さすれば得られん!!」

時雨がほむらを指差すと、ほむらに夢の力が与えられる。

「……欲望の盧生<sup>バカ</sup>二号!!」

「……試練の盧生<sup>バカ</sup>一号!!」

「……差別の盧生<sup>バカ</sup>三号」

「……死神の盧生<sup>バカ</sup>五号!!」

「……薬中の盧生<sup>バカ</sup>六号」

上から順に時雨、甘粕、五月雨、クリームヒルト、黄錦龍がそれぞれポーズを戦隊物のようなポーズを決めて名乗りをあげる。ほむらは付いていけず唾然とするしかないが、彼らの立ち位置の真ん中が空いている。そこに自分が入れと言うのか?出来れば遠慮したいと思っていた。

「さあ来いよ真打ち……英雄の盧生<sup>ハゲ</sup>四号!!」

「……誰がハゲだ!!」

時雨にツツコミを入れながら現れたのは汚れ一つないインバネスを翻す軍装の青年。その青年の事をほむらは知っていた。その男は近代で最も新しい英雄として知られている、第二次世界大戦を回避したとされている大正の英雄。

「終、四四八……!?!」

「違う!!英雄の盧生<sup>ハゲ</sup>四号だ!!」

「いい加減にしないと大江親兵衛仁叩き込むぞ……!!」

時雨の言葉に額に青筋を浮かべる四四八の姿は同い年の人間と変わらないように見える。だが、それでも彼が英雄である事には変わらないのだ。

自分を落ち着かせる為にか四四八は溜息を吐き、目の前に広がる絶望を見据える。

ワルプルギスの夜

此の世<sup>ア</sup>全<sup>リ</sup>ての悪<sup>マ</sup>ユ

百鬼空亡

逆十字

第六天波旬

超獣帝国

蠅声

黄金の獅子とその爪牙

ああ、確かにこれは絶望的な光景なのだろう。だがこの程度の絶望で折れる者などここにはいない。折れた少女ですら立ち上がったのだ。トンファーを構える四四八に追従する様に、五人の盧生<sup>バ</sup>と眷属<sup>カ</sup>となったほむらが立つ。

「――行くぞ、お前ら!!」

「!!!」

絶望を打ち倒し、未来を切り開く為に、六人の盧生が絶望に立ち向かった。

## 絶対魔獣戦線バビロニア

西暦2015年。魔術がまだ成立していた最後の時代。

社会は人間の手で構築されていたが、世界の真理を握っていたのは魔術師だった。魔術は科学では解明できない過去の人間の技術を司り、科学は魔術では到達できない未来の人類の技術を積み重ねる。彼等は決して相容れない学問の徒だが、ある一点において志を同じとしていた。魔術であれ科学であれ、それを研鑽する人間がより長く繁栄すること——即ち、人類史の守護である。

人理継続保障機関・カルデア。魔術だけでは見えない世界、科学だけでは計れない世界を観測し、人類の決定的な絶滅を防ぐために成立された特務機関。人類史を何より強く存続させる尊命の下に、魔術・科学の区別なく研究者が集められた。

西暦1950年、事象記録電脳魔・ラプラス成功。

西暦1990年、疑似地球環境モデル・カルデアス完成。

西暦1999年、近未来観測レンズ・シバ完成。

西暦2004年、守護英霊召喚システム・フェイト完成。

西暦2015年、霊子演算装置・トリスメギストス完成。

輝かしい成果は続き、人理継続保障機関により人類史は1000年先までの安全を保証されていた。

だが2015年。

何の前触れもなくシバによって観測されていた未来領域が消失。計算の結果、人類は2017年で絶滅する事が判明——いや、証明されてしまった。

なぜ。どうして。だれが。どうやって。多くの疑問に当惑するカルデアの研究者たち。

そんな中、シバは新たな異変を観測した。西暦2004年 日本ある地方都市。ここに今まではなかった、「観測できない領域」が現れたと。

カルデアはこれを人類絶滅の原因と仮定し、いまだ実験段階だった第六の実験を執行する事となった。それは、過去への時間旅行。術者を霊子化させて過去に送りこみ、事象に介入する事で時空の特異点を探し出し、これを解明、あるいは破壊する禁断の儀式。

その名を聖杯探索 —— グランドオーダー

これは、人類史を守る為に過去へと介入し、未来を取り戻す物語。

第七特異点、紀元前2600年の古代メソポタミア。人類が神との決別を図り、未だに濃い神秘が残っているこの時代でグランドオーダーは行われて佳境を迎えていた。

最後に立ちほだかるのは原初の母ティアマト。メソポタミア神話における創世の神の1人で多くの神々を彼女は生み出した。原初の父であるアプスーが生み出した彼女の子に討たれ、剣は彼女にも向け

られた。

生態系が確立された以上、ランダムに生命をデザインする彼女はどう不要な存在であった。生命体がこの星に準じた知性を獲得する行程において、彼女は邪魔者以外の何者でも無かったから。

ティアマトはそれに嘆き、狂い、新しい子供として十一の魔獣を生み出して神々と対決する。長きに渡る戦いの果てにティアマトと十一の魔獣は破れ、神々は彼女の死体を2つに割いて天と地を作った。

そうして世界から追放されて裏側の世界、並行世界ですら無い生命の存在しない虚数世界に彼女は追放され、以降虚数世界から元の地球に戻るチャンスは彼女は待ち続けた。

そしてこの世界に聖杯を送り込み、特異点として確立させた魔術王の策略により、ティアマトはビーストIIとして、七つの人類悪の一つである『回帰』の理を持った獣としてこの世界へと帰ってきた。

ティアマトがこの世界に帰ってきて初めて感じたのは間違いなく恐怖だろう。何せ彼女が生み出した神々しかいなかったはずの世界を見知らぬ生命体が支配していたのだから。

人間からしてみれば彼女はおぞましき侵略者であるが、彼女からしてみれば人間は恐ろしき異星人である。

故に彼女は人類を殺す。『現人類を駆逐しなければ自分が殺される』という極めて原始的なシステムで稼働している。そしてそれを責めることは誰にも出来ない。人類とて人類史の中で守る為に殺すという業を行なっているのだから。その規模が圧倒的に違うだけで、ビーストIIの行いは間違っていない。

だがそれを許すわけにはいかない。ここでビーストIIに好き勝手をしてしまえば特異点は完成し、人類史が焼却されてしまう。それを防ぐ為にカルデアの最後のマスターである藤丸立香とサーヴァントと人間の融合体であるデミ・サーヴァントのマッシュ・キリエライト。そして守護英霊召喚システム・フアイトによって召喚されたサーヴァントたちと共にビーストIIを打倒することを誓う。

ビーストIIには死が存在しない。たとえ殺そうとも逆行により帰して万全な状態になる。これをカルデアのDr. ロマンは乱暴ながらにもとある仮説を立てた。

ティアマトはすべての生命の母である。生命が存在していることがティアマトの存在を証明している。故に滅びない。逆説的に地上に“まだ生きている”生命いる限りビーストIIは滅びない。ティアマトは始まりにして終わりの女なのだから。ティアマトがこの地上で最後に死ぬ”事”でようやく通常の物理法則を受け入れることが出来るのでは無いかと。

そしてビーストIIを倒す為に藤丸とウルク王朝の王であるギルガメッシュとはある策を講じた。それは、ビーストIIを生命の存在しない冥界に落とす事。その途中で特異点に召喚されたケツァル・コアトルが犠牲となり、ギルガメッシュが自身とウルクの町を囮にする事で多大な犠牲を払ってようやくビーストIIを生命の存在しない冥界へと落とす事に成功した。

だがそれだけの犠牲を払ってもビーストIIは健在。確かにビーストIIを冥界に落とす事で最後の命とすることは出来たのだが権能はまだ残っている。自己改造のスキルにより自身の身体を竜体へと変え、生命を産み出し犯す黒泥はアヴァロンより駆けつけたマーリンの魔術により危険性は落ちたものの際限なく垂れ流され、彼女の尖兵である魔獣は無限に産み落とされる。

キングハサンこと初代ハサンがグランドの冠位を捨ててまで駆け付け、ビーストIIの角翼を切り捨てて死の概念を付与した。Dr. ロマンは通常のサーヴァントの霊基に変わり、これで完全に消滅されられると言ったが甘いという他あるまい。確かにティアマトは冥界に落とされた事で最も弱い状態になり、消滅させられる程に墮とされた。

されど神である事には変わらず。

されど産み出す母である事には変わらず。

されどその神威は変わらず。

醜悪なれど荘厳なその巨体で冥界の淵を掴み、地上へと帰ろうとしていた。藤丸らはそれを止めようとするもティアマトは体内から醜悪な魔獣、曰く新人類であるとされているラフムを大量に生産してこれを阻止していた。

「……マッシュ!!アルトリア!!」

「……ハイッ!!」

藤丸が名前を呼ぶ。それだけの事でマッシュとアーサー王であるセイバーのアルトリアは藤丸の意を正確に理解し、死角から迫り来るラフムを迎撃する。

「落ちろ……!!」

『ヌウン……!!』

2人の撃ち漏らしたラフムはアーチャーのアーラッシュが弓で射抜き、キングハサンが即死の斬撃を見舞う事で討つ。

「届かないか……ッ!!」

藤丸の心の中にあるのは焦り。あと少しの距離までティアマトの頭部に近づいたというのに無限に産み落とされるラフムがそれを阻止しているのだ。

冥界の主人であるエレシユキガルから与えられた加護があつて何とか持ちこたえられているが、この無限に産み落とされるラフムの壁を突破するには足りない。サーヴァントのシンボルである宝具を使えば突破できるかもしれないがティアマトの保持しているネガ・ジエネシスのスキルがそれを妨害していた。

ビーストIVが持つネガ・メサイアと同類のスキル。現在の進化論、地球創生の予測を悉く覆す概念結界。これを帯びたビーストIIは正しい人類史から生まれたサーヴァントたちの宝具に強い耐性を獲得する。仮にここから宝具を放ったとしてもネガ・ジエネシスに阻まれてティアマトは止まる事なく地上に向かうだろう。使うならば超至近距離でしか効果を望まない。そもそもこのラフムの大群を前にして宝具を使おうとすればたちまち群がられて殺される。

「ああもう!!鬱陶しいわねえ!!」

苛立ちを隠す事なく、武器である旗と剣を振るってラフムを迎撃するのはアヴェンジャーのサーヴァントのジャンヌオルタ。

「ヌウ!?余の墓でも無理か!？」

何とか宝具を発動させることが出来たライダーのオジマンディアスだった。ティアマトを押しつぶす様にして落ちるピラミッドがラフムによって見当違いのところ落ちてしまう。

まさに数が全て、数の暴力をティアマトは意図せずに体现してい

た。如何に歴史に名を残す一騎当千の英霊たちであろうとも、無限に沸き、死を恐れず、疲れる事もなく向かってくる敵を相手にしたことは無い。

あと僅かな距離だというのに、それが縮まらない。藤丸の中にあるのは焦燥。ここに来るまでに多くの人間が犠牲になった。その人たちの為にもティアマトを討たなければならないというのに、目の前まで近づいているというのに届かない。

そして、ついにティアマトが大穴の淵に手を伸ばした。

妨害する者は誰もいない。このまま地上に戻り、地球の生態系を塗り替えてすべての母に返り咲く。

それを見た藤丸がマスターに与えられたサーヴァントへの絶対命令権である令呪に意識を集中させる。カルデアからのサポートにより24時間に一回回復するのだが、ここに来るまでに二画使ってしまった最後の一画になっていた。

たとえ最後の命令権だとしても切らねばならない。ここでティアマトを止めなければ、犠牲になったギルガメッシュに合わせる顔がないと藤丸はアルトリアに宝具の使用を命ずる。

「アルトリア!! 令呪を持ってー」

「―――追放された存在でもう一度なんて願うなよ、萎えるだろうが」  
「―――お前はここに落ちろよ。人類史にお前の存在は不要である」

アルトリアへの令呪が使用されようとしたその刹那、大穴の淵を掴もうとしたティアマトの頭部に二隻の戦艦が落ちてきた。一隻でも大質量だというのに駄目押しと言わんばかりに二隻。ティアマトは避けることが出来ずに正面から衝突して動きを止める。

そして藤丸はラフムの群れの隙間から見た。ティアマトが手を伸ばそうとしていたところに二つの人影があることを。1人は茶髪を適当に纏めて日本帝国の軍服を着た中性的な顔付きの青年。そしてもう1人は先の青年と同じ軍服を着た黒い長髪の男性。

この場にあるはずのない格好をした2人は目の前にいるティアマトに臆する事なく、裁きを下す事にした。

「降れい神の杖!!裁きを受けよ―――」

「神鳴る裁きよ、降れい雷イ―――」

その瞬間、これまでのグラウンドオーダーで培った藤丸の第六感が最大級の悲鳴をあげ、頭上に濃密な死の気配を感じた。それは第六特異点で獅子王が行なった聖槍の一撃とは比べものにならない程。

「マシユ、宝具を!!全員集まれえええ!!」

なりふり構わずに藤丸は指示を飛ばす。幸いな事にラフムはティアマトに無礼を行なった2人に目掛けて行つたので妨害は無い。遊撃を行なっていたイシュタルとジャガーマン、ティアマトにはたき落

とされたマーリンを回収してマシユの側に急ぐ。

「……それは全ての傷、全ての怨恨を癒す我らの故郷……顕現せよ、  
ロオオオド・キヤメロット  
いまは遙か理想の城!!!」

真名の解放とともに顕現するのは白亜の城キヤメロット。円卓の騎士たちが座る円卓を盾として用いた究極の守り。その強度はマシユの精神に比例し、心が折れなければたとえ対界宝具の一撃を受けたとしてもその城壁は崩れはしない。

そして、神の裁きはここに下る。

「二ロットズ・フロオオオオム……ゴオオオオオオオットド!!!」

ティアマト目掛けて空の遙か彼方より神の杖が降り注ぐ。それは考案だけされて実現される事は無かった超兵器。全長6.1m、直径30cm、重量100kgの金属棒に小型推進ロケットを取り付けて高度1000kmの低軌道上に配備された宇宙プラネットホームから射出される一種の運動エネルギー弾。落下速度はマツハ9.5に達し、一発が核兵器相当の威力に匹敵し、地下数百m先にある目標が破壊可能とされている。

そんな超兵器が、豪雨の如くティアマトに降り注ぐ。直撃はすべてティアマトが受けているが、その余波だけでキヤメロットが軋みを挙げ、ラフムらは粉々に粉碎される。百や千では効かず、もしかしたら万を超えているかもしれない。それらがすべて、ティアマトだけを目掛けて落ちて来るのだ。

「グッ、ウウウウウウ……!!!」

「マシユ!! 頑張れ!!」

『……オイオイ嘘だろお!? 嘘だと言ってくれよ!!』



「第一盧生にして人類の裁定者、甘粕正彦!!」

「第二盧生にして我欲の霸道の王、時雨!!」

「……人類を救いに来た!!」

人類史の危機に、盧生<sup>バカ</sup>が舞い降りた。

## 冠位時間神殿ソロモン

2015年より時間軸から切り離されたカルデアは、ついにオルレアンから始まり魔術王ソロモンが直接過去に聖杯を送ったバビロニアまでの特異点をすべて攻略し、終局特異点となるソロモンの居城の座標を看破し、乗り込むことに成功した。

そして終局特異点へと乗り込んだ藤丸とマッシュ・を待ち受けていたのはカルデアを爆破した張本人であり、第二特異点ローマで自信満々に召喚したフンヌの大王アルテラに斬られて死んだはずのレフだった。

死者は生き返らない。それはこの世界の覆すことが出来ない法則。だがレフは人間では無く魔神柱であったが為にその法則には当て嵌らなかった。魔神柱を統べるソロモンが健在な限り、72の魔神柱は何度殺されようが際限なく出現する。

それはレフだけでは無い。

溶解炉を司るナベリウス。ゼパル。ボデイス。バティン。サレオス。プルソン。モラクス。イポス。アイム。

情報室を司るフラウロス。オリアス。ウアプラ。ザガン。ウアラク。アンドラス。アンドレアルフス。キマリス。アムドウシアス。

観測所を司るフォルネウス。グラシャ||ラボス。ブネ。ロノウエ。ベリト。アスタロス。フォラス。アスマダイ。ガープ。

管制塔を司るバルバトス。パイモン。ブエル。グシオン。シトリ。ベルト。レラジエ。エリゴス。カイク。

兵装舎を司るハルフアス。フルフル。マルコシアス。ストラス。フェニクス。マルファス。ラウム。フォカロス。ウエパル。

視覚屋を司るアモン。バアル。アガレス。ウアサゴ。ガミジン。マルバス。マレファス。アロケル。オロバス。

生命院を司るサブナツク。シャツクス。ヴィネ。ビフロンス。ウヴァル。ハーゲンテイ。クロケル。フルカス。バラム。

廃棄孔を司るアンドロマリウス。ムルムル。グレモリー。オセ。アミー。ベリアル。デカラビア。セーレ。ダンダリアン。

統合された魔神柱八体が2人の前に立ちはだかる。ソロモンがいる玉座に辿り着く為にはその魔神柱を制圧しなければならない。だが、各特異点で縁を結んだサーヴァントたちによる英雄連合が援軍に駆けつけても戦況は何とか互角という状況だった。

そもそも質が違う。人間が石でサーヴァントが岩だとするなら、魔神柱は山。

そもそも量が違う。人間が水溜りでサーヴァントが池とするなら、魔神柱は海。

英雄連合のサーヴァントたちは脱落が許されないのに対して魔神柱はソロモンが健在な限り何度でも出現する。72柱で一体の魔神柱は互いに互いを補い合って欠けたとしてもすぐに修復される。

圧倒的不利。勝機は無く、ただ現状を維持するので手一杯。

魔神柱が身を震わせる。その余震で藤丸は碎けそうになる。

魔神柱が触腕を振るう。その一撃で藤丸は致命傷を負う。

寸前のところでマシユが盾になるもののそんなものは焼け石に水に過ぎなく、藤丸の身体は見るも無残な状態になる。

「先、輩——」

魔神柱の触腕をいなしながらマシユは死に体の藤丸を心配する声をかける。藤丸は全身血塗れ。表皮はズタボロに裂けて骨はヒビだらけ、無事なところを探す方が難しい。

「——まだ、だあッ!!!」

それでも、藤丸は立っていた。砕けた足でしっかりと立ち、破裂して失った隻眼で魔神柱を睨み、息絶え絶えになりながらもまだまだと吠える。

「理解不能。理解不能。何故だ、何故まだ立っていられる？」

魔神柱はそんな藤丸を見て理解不能だと疑問の声をあげる。

藤丸には才能は無い。魔術師の適性はあれどその才は平凡で、十把絡げの凡夫に過ぎない。こうして終局特異点にいることだけでも異常なのだ。傷だらけになって心が折れる絶望を前にして立って吠えている姿は魔神柱にとって不気味な物だった。

「そんなの決まってる……」

掠れた声で紡がれた言葉は誰にも届かない。だが、藤丸は魔神柱の疑問に答えていた。

それはすなわち、「生きたい」から。

大義名分など凡夫である藤丸は持つておらず、ただ生きたいという「我欲」にてグランドオーダーを続け、ソロモンと魔神柱という「絶望」に立ち向かい、数々の英雄の姿に「勇気」を震わせてきた。生きて「良き一生」を送りたいと「夢を抱き」、それを邪魔する魔神柱とソロモンを恐れながらも邪魔だと「見下す」。

例え魔神柱がそれを聞いたとしても理解不能と一蹴するだろう。何せ魔神柱は人では無い。理性があり知性を持ち、感情を有しても人では無いのだから、人間である藤丸に共感することなど出来るはずがない。

だから魔神柱は触腕を振り上げた。英雄連合のサーヴァントたちは藤丸との縁で召喚された者たち。故に藤丸という分子が消滅すれば彼らもこの特異点に存在出来なくなる。

魔神柱の狙いに気づいたマシユが藤丸を抱えて逃げ出そうとするが無意味。何せこの特異点そのものが魔神柱であるから、逃げられるはずがない。逃げたその先に新たな触腕が待ち構えていて振り下ろされた。

よってこのグランドオーダーは失敗する。勝機は無く、力及ばずに。ソロモンの目論見である人理の焼却が果たされる――



「オノレオノレエエ!!! 不完全な人間風情がアアアアアア!!!」

魔神柱が激昂する。たかが人間と、英霊だと見下していた存在に分断されたのだから当然といえれば当然なのだろう。理性があり知性を持ち、感情を有しているのだから。

それ故に、彼女に嵌ってしまおう。

「人は人の下に人を置き、人の上に人を置いた——急段・顕象」

静かでか細く、それでいてよく通った声が聞こえたのと同時に魔神柱の巨体が重力に縛られる。動けなくは無いのだが機動力が削がれる。それも全ての魔神柱が。

「ねえねえ、見下していた人間に縛られるのってどんな気持ち? ばーかばーか」

何が起きたのか理解できたいなかったマシユと藤丸の側に現れたのは透き通るような白髪の少女だった。軍服を着ているがサイズが合わないのかブカブカで、無理して着ているように見えてしまう。

「大丈夫?」

「……あ、はい。えっと、貴女は?」

「私は皐月原五月雨、五月雨って呼んで。盧生って言ったら分かるかな?」

「盧生、だと……!?!」

盧生という単語を聞いて思い浮かべるのは第七特異点で駆けつけてくれた2人のサーヴァント。登場と同時にティアマトに向かって戦艦落として衛生兵器の集中砲火をかましてくれた彼らの事を忘れ

る事など出来ない。

「五月雨さん、貴女はもしかして人間ですか？」

ある事に気づいたマシユは馬鹿な事だと思いながらもそんな質問をしてしまった。魔神柱全てを縛る術を行使した彼女が人間だとは思えない。しかしその身体から発せられる気配はどう考えても人間の物にしか思えないのだ。

「そうだよ、私だけじゃなくてみんな人間。甘粕と時雨が気に入った人間が最終決戦するからってみんなで見物に来てたの」

「け、見物ですか……」

人理を賭けた最終決戦を見物しに来たと悪びれる事なく言った五月雨にマシユは思わず顔を引きつらせてしまう。人理焼却と言えは盧生であつても無関係では無いはずなのに。

「そりゃあそうさ、何せこれはお前たちの物語だからな。邪魔するのは不粋ってヤツだ」

「俺としてはすぐ様駆けつけてたかったのだがな、時雨にそう言われて耐えていたのだよ」

五月雨の隣に立ったのは茶髪の青年と黒髪の男性。その2人を忘れる事など出来るはずがない。彼らこそ第七特異点でやって来た盧生の時雨と甘粕正彦だったから。

「改めまして、第二盧生の皐月原時雨だ。前みたいにサーヴァントじゃなくて本体だからな」

「第一盧生の甘粕正彦だ。藤丸立香、お前の勇氣は俺のぱらいぞの住人に相応しいッ!!」

「いい加減にしろよこの馬鹿がッ!!」

藤丸を讚えながら空気が上手いッ!!のポーズを取ろうとした甘粕が横からやって来たインパネスを纏った青年に蹴り飛ばされる。ちなみに時雨も範囲に入っていたがひっそりと避けていた。

「うちの問題児どもが済まなかった。俺は第四盧生の柎四四八だ。この馬鹿たちが何かやらかしてなかったか？」

「柎四四八?……ああ、ハゲの人!!」

「時雨え!!甘粕う!!」

ハゲ四四八がひっそりとハゲ呼ばわりされているのにキレて時雨と甘粕に殴りかかったが前後からラリアットを食らって沈黙する事となる。

「……愛い愛い。愛いぞ、お前たち」

「……まったく、私に介護を任せて先に行かないで欲しいな」

気配も音もなく、藤丸とマシユの頭に手が乗せられて撫でられる。振り向けばそこには病人のような瘦躯の男性と豪華な金髪的女性がいた。

「初めましてだな。私は第五盧生のクリームヒルト・ヘルヘイム・レーベンシユタイン。こっちは第六盧生の黄錦龍だ」

「いるか?遠慮せずとも良い。お前たちの為に仕立てたのだからな」

何処か酔ったような話し方をする黄錦龍はそう言いながら懐から菓子を出して藤丸とマシユに差し出す。黄錦龍に悪意は無く、純粹に好意から来るものだと察した2人は戸惑いながらも差し出された菓子を手に取る事にした。

「盧生ってまだ来るんですか?これ以上はお腹いっぱいなんですけど……」

「安心してくれ、6人で終わりだ」

「お前たちの夢を聞かせてくれ。俺はお前たちを救いたいのだ」

黄錦龍は終始自分の中で完結している。故に自分の為すべきことをしようとする。それでも問答無用で阿片の夢に沈めていた頃に比べれば改善された方だ。

「私たちの、夢……」

「ソロモンの元に向かいたい」

マシユが言い淀んでいる隣で藤丸は迷う事なくそう告げた。ソロモンを倒したいと口にすれば黄錦龍はそれを叶えてくれるのだろう、それが出来る力がある事は知っている。だが、彼らは所詮部外者に過ぎない。この世界とは別の世界から来ていることは時雨と甘粕から聞いている。だから、この世界の住人である自分たちの手で倒すという意味を込めてそう言った。

「分かった。その夢を俺が叶えよう」

藤丸の言葉に黄錦龍はそう口にして、この特異点の中心に身体を向けた。

「人皆七竅有<sup>ひとみなしちきょうあ</sup>りて、以<sup>し</sup>つて視<sup>しちよう</sup>聴<sup>しよく</sup>食<sup>しよく</sup>息<sup>しよく</sup>す。此<sup>こ</sup>れ独<sup>ひとり</sup>り有<sup>あ</sup>ること無<sup>な</sup>し。

太極より両儀に別れ、四象に広<sup>ひろ</sup>がれ万仙の陣<sup>じん</sup>——」

その時、世界が変貌する。魔神柱を制圧しなければ開かないはずの中心への、ソロモンの玉座への道が開かれた。

魔神柱は驚愕する。バカな、ありえない。自分たちが健在である限り道は開かれないはずだと。

「終段顕象おーおー」

甘いと言わざるを得ない。黄錦龍の祈りは夢を見せる事。その為に彼は夢を現実へと変えてみせる。望まぬ者がいなければ無力でしかないのだが、逆に言えば望む者がいるのなら最凶なのが黄錦龍なのだ。

「四凶渾沌ーおー鴻・鈞・道・人イイン」

黄錦龍の詠唱に従い現れ出たのは直視してはならない渾沌だった。現れたのは目も、耳も、鼻も、口も存在しない数億の触手で編み込まれた翼と獣毛の塊としか言えない冒瀆的な渾沌。その渾沌の正体は人の想像の産物として生み出された架空の神格。本来ならば神格を有していない筈の渾沌であるのだが人々からの指示を受けて最高位に等しい神格を有している。

「さあ行くが良い。この現実で、どうか生きてくれ」

そしてふと気がついた。藤丸の身体の傷が消えている事に。全身がズタボロになって死に体だったはずなのにいつの間にか元に戻っていて、破れた礼装ですら無傷になっている。

「ーおーありがとうございます!!行こう、マシユ!!」

「ハイッ!!」

黄錦龍に頭を下げて、藤丸とマシユはソロモンの玉座に向かって駆け出した。

それを拒むのは魔神柱。四四八の手で分断させられたとはいえ総数は変わらず、五月雨の急段に縛られているとはいえ動けない事はない。だから主の元に向かおうとする2人を排除しようと動く。

「――怒りの日 終末の時 天地万物は灰燼と化し

ダビデとシビラの予言のごとくに砕け散る

たとえどれほどの戦慄が待ち受けようとも 審判者が来たり

厳しく糾され 一つ余さず燃え去り消える

我が総軍に響き渡れ 妙なる調べ 開戦の号砲よ

皆すべからく玉座の下に集うべし

彼の日 涙と罪の裁きを 卿ら灰より蘇らん

されば天主よ その時彼らを許したまえ

慈悲深き者よ 今永遠の死を与える エエイメエン」

「――海は幅広く 無限に広がって流れ出すもの 水底の輝きこそ  
が永久不変

永劫たる星の速さと共に 今こそ疾走して駆け抜けよう

どうか聞き届けてほしい 世界は穏やかに安らげる日々を願って  
いる

自由な民と自由な世界で どうかこの瞬間に言わせてほしい

時よ止まれ 君は誰よりも美しいから

永遠の君に願う 俺を高めへと導いてくれ」

「――終段・顕象!!!」

それを阻むのは時雨と甘粕。2人は前にも藤丸とあったからなのか彼のことを認めていた。故に動く。彼らの邪魔をさせてなるものかと。

甘粕の背後に現れるのは黄金の戦神。愛と破壊を同一視し、破壊神としての側面を持つこの神格と甘粕の親和性は非常に高い。

時雨の背後に現れるのは黒い肌と赤い髪青年。時雨の属性は《俗物》でありその人間賛歌は我欲。よって渴望により現人神へとなった神格との親和性は甘粕に勝るとも劣らないほどに高い。

そして召喚した神格をその身に降ろす。それは他の盧生では真似する事が出来ない禁断の業。後にも先にも時雨と甘粕以外に出来ない所業だった。

「混沌より溢れよー怒りの日!!!」

「新世界へー語れ超越の物語!!!」

そしてその神威が解放される。

甘粕の側に現れ出たのは黄金の髑髏。破壊神が率いた配下たちが破壊神を降ろした甘粕に従い魔神柱を破壊する。

時雨は変わらず1人だが眼前にいる魔神柱の動きが止まっていた。その神格の能力は時間の停止。神格を降ろした時雨の許可がなければこの時間の縛鎖からは逃れる事は出来ない。

「行けッ!!」

「行けよ、俺が認めた益荒男よ!!」

「行って、勝ってこい!!」

「頑張ってね」

「一発殴って来い」

「さあ、夢を叶えてくれ」

藤丸とマシユは6人の盧生バカの声援を受けながらソロモンの玉座へ向かっていった。